

孤独死を考える（1）

ひとり暮らしの方にとっての心配事といえば、いわゆる「孤独死」が真っ先に挙げられることでしょう。

そもそも「孤独死」という言葉には明確な定義があるわけではなく、主にひとり暮らしの者が誰にも看取られることなく、住居内などで生活中的突発的な疾病などによって死亡することを指すことが多いのですが、実際には1970年代にマスコミによって作られた造語だそうです。



その後、2000年頃から日常の社会問題として、マスコミで頻繁に取り上げられることが多くなりましたが、2009年に当時62歳だった女優の大原麗子さんが自宅で亡くなっているところを発見され、「孤独死」という見出しでセンセーショナルに報道されたことが一つのきっかけとなり、「孤独死」という言葉が一般的に使われるようになりました。

筆者自身は、「孤独死」という言葉はあまり好きではありません。突発的な疾病により自宅で亡くなること自体が、果たして「孤独」で、哀れで、可哀想なのでしょうか。

厚生労働省の人口動態統計年報によれば、昭和30年時点では、死亡した人のうち病院が死亡場所だった人は全体の12.3%に過ぎず、自宅で死亡した人が76.9%と全体の4分の3以上を占めていました。この割合が入れ替わったのは昭和52年の間であり、それまでは自宅で死を迎えるのが当たり前だったのです。

ちなみに最新の2020年の統計では、病院が死亡場所だった人の割合は82.4%、自宅が死亡場所だった人の割合は15.7%となっています。一貫して低下を続けてきた自宅死亡の割合が、2011年頃の12%台前半を底として少しずつ上昇してきており、2019年の13.6%から、2020年には15.7%に急上昇したことは、気になるところです。

自宅で死ぬのが当たり前だったものが、なぜ逆に「孤独」と言われるようになってしまったのでしょうか。問題は、誰にも看取られずに死を迎え、そのまま長時間誰にも気づいてもらえない事態になってしまったことにあります。

自宅で誰にも看取られずにひとりで死を迎えたとしても、その後、それほど時間を置かずに、誰かが発見してあげさえすれば、それは「孤独」ではありません。

ひとり暮らしではなく家族と同居していたとしても、たまたまひとりで留守番をしていた時に、突然の発作等で誰にも看取られずに自宅で亡くなってしまいうケースと、ひとり暮らしで突然亡くなったがすぐに発見されたケースでは、それほど差異はないでしょう。

つまり、ひとり暮らしが「孤独」に繋がるのではなく、ひとり暮らしの方々が万が一のときにも誰にも見つけてもらえないことが「孤独」に繋がるのです。

今回は、自宅での急な体調不良が、「孤独」な死に繋がらないための備えについて、一緒に考えてみましょう。